

研究論文 平田オリザワークショップにおけるコミュニケーション教育の可能性

内藤三和子、平田オリザ、角和博、多田育美、伊藤宣子、フイツシユ明子、藤本祐子、岩橋充世

Possibility of Education for Human Communication at Hirata Oriza Workshop:

About Production Process of Dialogue Play and Consciousness of Participants

Miwako NAITO, Oriza HIRATA, Kazuhiro SUMI, Ikumi TADA, Noriko ITO, Akiko FISH, Yuko HUIJIMOTO, Mitsuyo IWAHASHI

はじめに

二〇一七年夏、平田オリザの演劇制作ワークショップに参加した。日本の演劇界をリードし、フランスや韓国などで海外公演を重ねる氏は、日本の教育界にも影響を与えてきた。国語科の教科書(三省堂小六・中一)には対話劇の教材を載せ、毎年日本全国で演劇ワークショップや講演会を行う。福岡県では昨年度と今年度、演劇づくりの連続ワークショップを実施して指導した。主催者は演劇づくりを通してコミュニケーションを学ぶということを標榜しているが、教育関係者、主婦、会社員、高校生など参加者の思いはそれぞれにある。私自身は今年初めてワークショップに参加して演劇づくりを学ぶことになった。中学校で国語科の教員をしながら、演劇には独自の教育効果があることを感じていたことと、平田オリザのメソッドに学びたいという思いからである。

本論考はワークショップのプログラムと演劇づくりを振り返りながら、筆者が参加したグループを視点に、どのように演劇制作していったのか整理し、アンケートによる参加者の気づきや来場者の感想に触れて、演劇の持つはたらき、コミュニケーションにおける効用を考察していく。

研究内容(WSのスケジュールと考察)

声出しのワークショップ

7月16日(日)

身体のワークショップ

対話劇の制作過程と参加者の意識に関する考察

カードを使ったワークショップ

シナリオを使った自然さを出すワークショップ

演劇づくり① オリザ式企画立案「場所・背景・問題」

オリザ式人物構成「内部・中間部・外部」

オリザ式プロット作成

※主催者の計画とは別の自主的活動

7月23日(日)

8月6日(日)

8月11日(金)

8月13日(日)

シナリオ(列車の中)を使ったワークショップ

8月20日(日)

シナリオ(同時多発)を使ったワークショップ

9月3日(日)

9月17日(日)

9月23日(土)

9月24日(日)

演劇づくり② リハーサル

※主催者の計画とは別の自主的活動

本番

振り返りアンケートと筆者の考察

オリザ式ワークショップとコミュニケーション教育

台本データ



声を出して仲間を集めるワークショップ

## 声を出して仲間を集めるワークショップ

7月16日(日)

演劇ワークショップは7月～9月の週末、祝祭日の8日を使って行われた。初日は講義とワークショップである。まずは声出しのワークショップだった。オリザ氏に「好きな色は？」と聞かれ、参加者は「赤！赤！」などといいながら好きな色同士のグループに分かれて座る。他の質問は「好きな果物は？」「福岡といえど？」「ベルギーといえど？」「日本といえど？」などがある。お国や、住んでいる地域の質問には、観光名所や特産物、郷土料理などがあがる。二月に佐賀大で行われたワークショップでは、「佐賀といえど？」という質問が当然のように入っていた。ただし、ご当地の質問は地元の人と外部の人間とでズレが生じることだった。例えばベルギーに関しては、ワッフルやチョコレート、しよんべん小僧などがあがるが、ベルギーの人に聞くと人数の多いグループの一位はフライドポテトのことである。日本にはベルギーフリッターはほとんど上陸しておらず、これが話題になったときには言葉の持つ認識のズレを発見することになる。

日本でのズレの例としては福島県を挙げていた。オリザ氏は福島復興のシンボルの一つになっている福島県双葉郡にあるふたば未来学園で授業をしている。「福島といえど？」という質問に対して生徒たちはリンゴ、桃、ままだおる(菓子)、ハワイアンズ(娯楽施設)などをあげることが、外部者に同じ質問を投げかける時、「原発」が一位となってしまう。コミュニケーションの問題は認識のズレを知ることからと改めて考えさ

せられる。

この声出しのワークショップは、四月の中学校の入学直後や進級クラス替えの直後に行くと効果的である。筆者の所属する中学校は七つの小学校から新入生を迎えるが、そのうち六つの小学校は単クラスで六年間クラス替えというものがない。しかも、大抵は三十人にも満たないクラスで児童は互いをよく理解しており、教師もクラスメイトも表情一つで具合が悪いことも、授業を理解していないことも察してしまう。だから中学生になっても、「具合が悪いので保健室に行ってくださいか」「トイレに行きたいです」「この問題が難しくて解けません」というような、当たり前のことかと言えないでいる生徒が意外に多い。では、都会育ちの生徒なら言えるのかとも思われるが、自分を代弁してくれていた仲間と離れると何も伝えられなかったり、積極的に伝える生徒に押しやられて言えなくなる生徒も多いと感じてきた。声を出し、移動してグループになる。単純な活動だが、人が生活を営む上で必要な技能が身につくと考えられる。更に災害時、地震で停電になった百貨店や映画館などでは、暗闇や危険な状況の下で大勢の人が避難することになる。そんな時「怪我をした人はいませんか？」「自分で動けない人はいませんか？」「子ども連れの人はいませんか？」「お年寄りはいませんか？」「力のある人は？」「さまざまな言葉が行き交うことだろう。その時に、意思の疎通を図り正しい判断のできる人間を育成したいと思うのである。学校や学年単位でこのようなワークショップを行う際に、「これは学びではない」「単なる遊びだ」と思う職員もいると思われるが、自分の状態を伝える訓練としての認識を共有できればと思う。

オリザ氏は声出しのワークショップの際に「中一の困難」を挙げる。中学一年生は思春期の入り口。面倒くさい雰囲気を出したり、「あつちは女が多いな」などとグループになりたくない理由を見つけて「好きな果物は？」と聞かれても、いつもの仲間と「りんごでいいよ」と妥協した



背中合わせのワークショップ



信頼関係のワークショップ

グループをつくってしまおう。そのようなことが起きた際には「電話番号の末尾」「誕生日」などの選択的ではない質問に変えると、さすがに中学生もそこまで示し合わせてはこない。また、同じ誕生日のグループで誕生日を確認すると、誕生日の一致が起きることもある。これは一定数成立し（四〇人学級なら一組程度）、すごい確率で出会った仲間のようになってしまうこともできると展開のコツを伝えている。教室ですぐにでも取り組める活動である。

### 身体を使ったワークショップ

声出しの次は身体を使ったワークショップとなった。二人が背中合わせになってお尻を床につけて足を伸ばして座り、メトロノームのように交互に倒れたり、互いに動いて背中で円を描いてみたり、背中で喧嘩を試してみたりする。背中合わせの最後は二人が背中合わせのまま立ち上がるのである。これは、ある程度互いの背中に体重を預ける気持ちと勢い

があるときなのだが、相手に対して遠慮があると難しい。

次に三人一組になって、一人が前後に傾くように倒れるのを二人が前後で肩と背中で受け止めるというもの。小さな傾きから大きな傾きへと変化をつけていくが、競争を目的とはしていないので、怪我をしないように危なさを感じ始めたところで止めるのがよい。このワークショップは信頼関係のワークショップとも言われていて、長時間に及ぶの手術のチームや宇宙飛行士など、一つのミッションをやり遂げることを目指す人たちが互いを認め信頼関係を築くために行ったりする。私は薬物中毒患者の更正プログラムを扱ったテレビ番組で見たことがあった。これを会場で行うと、初対面の人に対しても目や表情を見たり動きを捉えようという積極的な姿勢が生まれる。相手にもその姿勢があることを確認できると、同じ目的を持っているという信頼する気持ちが生まれて、一種の安心感を覚える。

身体を使ったワークショップで気をつけないといけないのは、虐待を受けている生徒などがある場合に活動が困難になる可能性があるということだった。参加を拒む生徒には無理にはさせず、活動を見せながら活動の意義を話してみるのでもいいかもしれない。

### カードを使ったワークショップ

声と身体を使ったワークショップの次は演劇づくりの講義をはさんで、数字のカードを使ったワークショップを行った。<sup>\*4</sup> 1〜50の番号の書かれたカードをランダムに二十名程度の人に配る。配られた数字は本人しか見えてはいけない。大きな数字は激しい趣味、小さい数字は大人しい趣味の人ということを自分の数字を見て設定する。実際の自分の趣味とはもちろん関係ない。方法は立食パーティのように歩いて互いに自分の趣味を紹介し合い、近い数字と思われる相手を見つけてカップルになる。数字が一番近ければベストカップル、一番遠いのはワーストカップルとなる。





カードを使ったワークショップ

このワークショップには自分とは異なる趣味を持つ人物を装う「演じる要素」が入ってくる。そして、言葉の持つイメージは人それぞれ違っていることを認識させられる。「カラオケ」と「楽器演奏」の趣味のカップルは、音楽好きで番号が近いように思えたが、「カラオケ」を人前で歌う大胆な趣味と考えて38番にしていたり、楽器の演奏をじっと同じ場所で演奏するからと14番にしているワークショップになった。しかし、各個人の言葉の解釈の違いはコミュニケーションで回避することができる。回数をこなすと（筆者は三回目）趣味を聞くだけではなく詳しく尋ね、相手が激しい趣味として言おうとしているのかどうか探っていくとする。また、趣味の種類も微妙な数字の差異を表そうとして「寝ること」の次の番号に並ぶイメージとして「布団の中で壁のシミを眺める」趣味など想像を喚起させるものが現れる。経験はコミュニケーションを深化させる。このワークショップは他にも「自社製品の大小」を数字で表すというのを行った。「病院での病気の軽重」「刑務所での罪の軽重」なども課題として行われてきているが、後の二つは教育的に学校現場ではやりにくい。医療関係者が多く参加していた佐賀大学のワークショップで「病気の軽重」をした際には、さすがに症状の説明が専門的で興味深かったのを覚えている。

### シナリオを使った自然さを出すワークショップ

次にシナリオを使ったワークショップを行った。清水と源という人物



自然さを出すワークショップ

の会話がA4一枚に書かれている。源は具合が悪く病院に行ったことが清水の問いかけでわかる。二人は大学院生らしく、大学教授や研究所の話題が出て、その関連は語られないものの、猿や人がこれからたくさん来るという内容で話は終わる。これを自然に演じてみるという練習だったが、興味深いのは、初め椅子に座って台詞を言っていたのを次は寝そべって言うてみる、そして、次は歩きながら言うてみる、すれ違う人に挨拶しながら言うてみる、などのオプションをつけながら言うてみたことである。このレッスンについてオリザ氏は、人は何かをしながらかたがた話すことが多いこと、動きが入ること、台詞を言う緊張から解き放たれること、そしてこれから制作する演劇にこのようなオプションを入れていくことを意識させていた。

氏は「日常の様々な動作を、意識して、自由に組み合わせ、何度でも新鮮な気持ちで演じることができる」ことを俳優に要求する第一条件としている。このワークショップは俳優を養成している訳ではないが、このようにオプションをつけていくと、やっている方は大変なのに演技が「自然」なものに見える。動きに負荷をかけて台詞と動きを更に「本当らしく」見せることを追求する活動だった。

### 演劇づくり① オリザ式企画立案「場所・背景・問題」

昼休み、昼食時間と並行して劇づくりのアイデアを参加者が紙に記入して掲示していくことになった。「場所・背景・問題」をA4一枚の紙



表1 オリザ式企画立案

氏名	〇〇 〇〇
(場所)	ファミレス
(背景)	親子参加のクラス 懇親会の後
(問題)	発達障害、アスペル ガーの(空気が読めない) 子がいて対応に困る。
	〇〇 △△ ××××

出すドラマが氏の目指す対話劇である。茶の間で家族は日常会話はするが、見ている観客に伝わるような対話はほとんど行わない。父親の仕事が何なのか家族では周知のことなのでそれは話題にはならないのである。しかし、そこに娘の結婚相手が現れると状況は一変し、母親がお茶を入れながら「最近銀行も大変だね」など父親の職業を口にしたたりする。場とそこにいる人の構成の如何で台詞が決まってくるのである。茶の間は私的な内部空間だが、そこに新しい家族となり得る人物が現れた

に一つ書いて掲示する。一人一つ以上のアイディアを出すということになった。オリザ氏が行うのは一幕ものの舞台づくりである。舞台が暗転して大道具が入れ替わって別の場所となった。舞台が回転するような装置は用いない。一つの場所が創り

り、葬儀の準備に親戚が出入りしたり葬儀屋が来たりすれば、そこは半公の空間に変貌する。内部の人間と外部の人間が交流する場が演劇空間としてふさわしい。それをオリザ氏はセミパブリックの場と呼んでいる。そのような場で、どんな背景を持った人物たちがどんな問題に直面するのか提案するということが課題だった。

筆者は表1のようなアイディアを出した。他にも「女子高校の職員室」で「夏休みに学校の中核となる先生たち」が居合わせて「LGBTの生徒の入学が決まって対応に

困る」というものを出した。三十五人のワークショップ参加者がそれぞれ一つ以上のアイディアを提示するので、ホワイトボードにそれらを掲示すると壮観である。午後の部が始まった。アイディアを参加者が互いに見合っけて〇印をつけて数を絞っていく(五個だったか)。次は△印で三個、次は×印で一個というように。○△×の記号は便宜的に使っただけであり、良し悪しを表しているのではない。記号の数が多ければ多くの人にアイディアが支持されたことになる。アイディアの数が絞られてきたところでオリザ氏がこのテーマは問題が問題点として軽い。あるいはそのことでは悩まない、などとコメントした。良くないと否定されたのは銀行強盗が現れる刑事物である。対話による展開ではなく人物の動きで見せる内容なので、テレビや映画では成功しても舞台には不向き、対話劇にはならないからである。そこでは言葉による展開がほとんど行われないことは想像がつく。そして、アイディアは五つに絞られることになった。提案者からの簡単なプレゼンも入れて、このアイディアも五つの中の一つとして採用されることになった。

それぞれのアイディアに集まる形で三十五人が七人ずつの五グループに編成された。このテーマは教育関係者の問題意識を刺激して、大学教員2名、高校教員1名、中学教員1名、学童保育職員1名、ふくおか教育を考える会役員2名というメンバーが集まることになった。

メンバーが集まったところで、「場所、背景、問題」をより詳しく考えることになった。「場所」はファミレスからランチルームに変わり、そして最終的に中学校の会議室に決まった。「背景」は懇親会から文化祭前のバザーの準備ということになった。「問題」の「アスペルガーの子の対応に困る」という問題部分はその子が教室の窓から飛び降りようとする事件が起きることと、それをきっかけにフリースクールに行くべきか否か親たちの意見が分かれる展開にすることになった。ここでオリザ氏から受けたアドバイスは重要だった。

「フリースクールか学校かの結論は発達障害の問題とは全然違うことで、例えば野球部のメンバーが足りなくなるから困るようなことで決まるのがいい」というものである。発達障害の子の居場所を決めるのに、その子の特性は問題にしないという点。言わば結論の出ない問いをいとも簡単に結論つけてしまう点に「正か非か」では物事が決まらない現実世界につながる演劇の可能性を思わされたのだった。

### オリザ式人物構成「内部・中間部・外部」

次にメンバーで登場人物を考えることになった。人物は内部、中間部、外部で構成することになっていた。内部の人間だけでは話が進まないが、中間部や外部との接触で内部の人間に様々な情報がもたらされていく。(図1参照)。内部が母1・母2・母3(後に安武・魚住・古賀と決まる) 中間部は担任・カウンセラー(向田・香山)。外部は校長・母4(田中・佐藤)と決まった。性格や人間関係、演劇の展開に関わっていく動きや思いなど、人物に付随する情報も出し合っていた。この日はこれで終了となった。

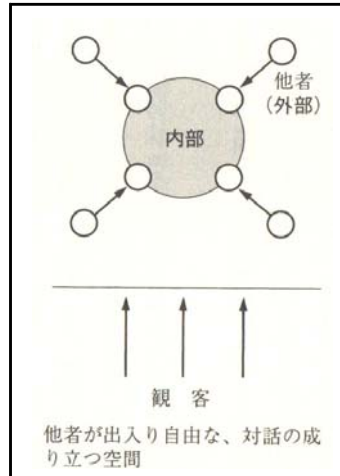


図1 セミパブリックな空間

『演劇入門』P49より

### オリザ式プロット作成

7月23日(日)

この日は台本のプロットを作った。オリザ氏が不在のため、アシスタントの村上差斗志氏(福岡の演劇人)が進行とアドバイスをを行った。プロットは一般的に物語の筋を表す。オリザ氏の手法も筋をつくるという点では変わらないが、それは図式化した独特のスタイルがある。プ

ロットには「観測地などを点でグラフに書き入れる」という意味もあり、人物の出入りを図で書き入れる点では後者の意味も含まれている。

作業はその場面(プロット1とカウントする)での人の出入りとそこでもたらされる情報の内容を書き入れる。プロット全体(第一段階では十三プロットとなった)を同様のスタイルで作成する。この段階では台詞は考えない。場にいる人の出入りがどんな情報をもたらし、展開するのかという大まかな流れを考える。氏自身も自らの創作法の特徴と言っている部分で、このスタイルを作ったところから台本づくりが始まるのである。

四コマ漫画や絵コンテを思わせる枠に人の出入りを矢印で示してそのプロットで観客に示される情報を右側に書き込んでいく。その作業をこの日各グループで行った。作成されたプロットはメールでオリザ氏に送られ、評価を受けることになっていた。

オリザ氏のメールは次の通り。

プロット4、プロット10などが重要になるはずなのですが、ここで伝えたい情報が何も決まっていないとあとで混乱します。(略)  
全体にアスペルガーのことだけで議論を進めるとリアリティがなくなり、薄っぺらい演劇になってしまいます。人間関係、母親同士の好き嫌いや年齢などの上下関係、そういったもので議論を右往左往させる必要があります。そのためには、もう少し人の出ハケを使って、二人のシーンをなどを創った方がいいかもしれません。

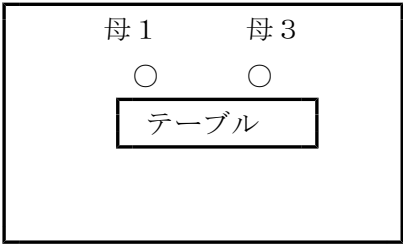
(7.29)

プロット4、10は人物が出入りしているのに情報の変化を描けていない点を指摘された。そして、それ以下の点も克服していくことになった。

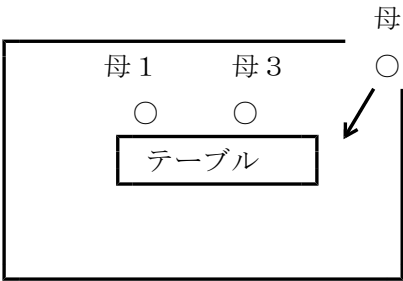
表2 オリザ式プロット枠に従って作成したプロット

人物 内部 母1 母2 母3 中間部 担任 カウンセラー 外部 校長 母4  
 後に 安武・魚住・古賀 向田・香山 田中・佐藤 と決まる

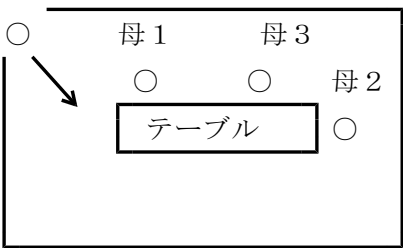
プロット1

登場人物	観客に伝えたい情報
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の会議室</li> <li>・バザーの前日、バザーの準備で値札をつけている。</li> </ul>

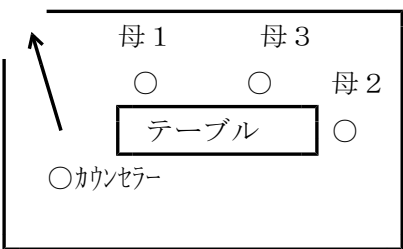
プロット2

登場人物	観客に伝えたい情報
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アスペルガーの子が教室の窓から飛び降りようとした</li> </ul>

プロット3

登場人物	観客に伝えたい情報
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カウンセラーがカウンセリングに来ない母4を探しに来る。</li> <li>・カウンセラーに母親たちが相談する。</li> <li>・母1はフリースクールに行った方がいいと思っている。母2はアスペルガーの子がフリースクールに行くのは反対。母3はどちらにもつかず中立。</li> </ul>

プロット4

登場人物	観客に伝えたい情報
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カウンセラーが母4を探しに行く。</li> </ul>

※プロット5以降は載せていない。



8月6日(日)

プロットの完成と台本作りを推進させるため、ワークショップの計画とは別にメンバーが集まった。この日話し合って決めたことは二点。

まず、アスペルガーの中学生がなぜ飛び降りようとしたかである。言葉通りに真に受けてしまう性質がアスペルガーの生徒にあるからと言って、誰かに言われたから飛び降りるとまではいかないだろうし、もしその考えを採用したら雰囲気が悪化するものになってしまう。アスペルガーの特性に矛先を向ける気はなかった。もつと前向きな理由が欲しかった。アスペルガーの生徒は極端に好みが偏っている。<sup>\*</sup>偏った部分に関しては特化した優れた能力を持っている場合が多い。そこから、珍しい昆虫を捕らえようとして夢中になって窓から落ちそうになったという設定を考えてみた。

次に、アスペルガーの生徒が学校で過ごすべきかフリースクールに行くべきかを決定づける理由を考えることにした。様々に付箋にアイデアを書いてテーブルに貼り出していく。そして、決まったのがロボカップ参加である。ロボットコンテストのジュニア大会があり、地方大会、全国大会、世界大会が行われている。アスペルガーの生徒はロボット制作の中心となるプログラミングを担当するということになった。興味深かったのは居合わせたメンバーに、ロボカップの運営に携わった人がいたり、保護者として子どもの参加を見守った人がいたことである。筆者はネットで確認する以外には情報を得ることは難しかったが、彼らが大会の存在を身近に感じさせてくれたことが良かった。

二つの重要事項を決定し、オリザ氏の指摘をかなりクリアしてきたところで台本作りをした。プロットが出来上がっているので、プロット毎に展開の確認をしながらイメージの沸く台詞を口々に言ってみるのである。台詞は口語だから、まず言ってみることにして、それを録音してその日は解散し、筆者が台本に書き起こしていった。

8月11日(金)

この日には初期の台本が完成し、集まったメンバーで読み合わせて修正を加えていたり、意見が分かれるところを話し合った。

このようなオリザ氏が来ない日の午前中にアシスタントの村上氏によるワークショップを入れていくことがあった。教材はオリザ氏の作成したものを用いた。この日は登校中の小学生が外国人に道を聞かれる内容のテキストを使った。初めは台本通りに練習し、次は外人役も日本人役も英語を取り入れながら演じてみた。英語を使うと、理解しようと頑張る小学生の雰囲気が出やすかったように思う。このテキストは城崎温泉で有名な豊岡市の中学校で用いられている。<sup>\*</sup>観光地仕様とも言えるので、その土地のお勧めスポットで台本を書き換えると全国各地で使えるものになる。

また、即興で対話劇を創る取り組みも行った。五グループが「場所・背景・問題」を話し合っただけで、「内部・中間部・外部」の人物設定を行って、台詞は即興で入れていくというものだった。即興ゆえに相手の動きや言葉を探るぎこちなさはあるものの、台詞のない時の役者の動きの重要性など学ぶものがあつた。

8月13日(日)

この日は台本の読み合わせをしてオリザ氏からアドバイスを受けた。いきなり本題に入ってはいけないというのがアドバイスの中心だった。プロット1はバザーの話題をもつと入れていく。プロット2もいきなり飛び降りた話題を入れるのではなく、世間話かバザーの話<sup>\*</sup>を入れてから本題へとのことだった。これがオリザ氏のいうエピソードにあたると思われる。プロットでの伝えたい情報から離れた会話を入れていくことで、その場にリアリティを出していくのである。これは全てのプロットに必要な要素という訳ではないとのことだったが、観客とのイメージ作りを兼ねていることを考えると作品の前半には特に必要になる。そのアドバ



イスに従うとプロットの台詞は二倍に膨らんでいくことになった。ゴシック太字はエピソードとして後から挿入した部分である。

プロット1

伝えたい情報……文化祭前の会議室・バザーの準備をしている母たち

話される内容……売り上げが心配

実際の台詞……

安武 古賀さん、エアコン入れてくれる？

古賀 はい。九月も終わりなのに、いつまでも暑いですねー。

安武 ホント、会議室エアコンが入るから助かるわー。

あ、手作りマスコットの値札は全て二〇〇円をお願い。

古賀 はい。今年はせっけんの集まりが少ないですね。タオル

は沢山ありますね。

安武 ああ、山本さんのおばあちゃん思い出しちゃった。

古賀 お目当てはタオルですよ。

安武 そう、三十分前から並んで五箱も買ってきてくれて。バザー楽しみにしてくれてるのね。

そんなに何に使うんでしょうね。

安武 確かに。タオル好きなんですよ。

古賀 ええ。

明日、天気よかったですよ。

安武 雨だと荷物が大変だから、文化祭だけで帰っちゃう人もいるの

よね。

古賀 そうなると、売り上げが心配ですよ。

\*安武うなずく。

この日もう一つオリザ氏からの指摘で変更があった。それは、校長と担任の二人で話しているプロットに母親を一人残すというもので、学校職員だけで話しているところに母親が割り込んでいくことになる。親の前で教師たちは裏事情を話さないだろうと少し困ったのだが、母親が部屋に残っていることに気づかずに校長と担任が話していたということにして課題をクリアした。(プロット9)

すると、この場面を修正したことにより、対立する母親二人の間で右往左往していた古賀(母親3)が生き生きと動き出し、人物関係が立体的になった。古賀を生き生きとさせたかった訳ではなく、プロットに残したことでそうなった。内部同士の人間関係から一人離れたプロットをつくったことで個人が輝きを放ち始めたのである。場の持つ関係性で人が動き、語る。オリザ氏という「関係性の演劇」が見える思いがした。

### シナリオ(列車の中)を使ったワークショップ

この日、オリザ氏は全てのグループの確認の後、シナリオを使ったワークショップを行った。特急などの旅客列車のボックス席に二人連れの乗客が向かい合って座り、話している。そこへ、他人が「ここ、よろしいですか」と片側の席に座る。その後、少ししてこのよその人に「旅行ですか」と話しかける内容の台本である。

オリザ氏は「みなさん、旅行で隣り合った人に話しかけますか」と質問を投げかけた。話しかけるといふ人は三分の一度だった。演劇ワークショップに参加する積極的と思える人たちがこの程度だから、一般人はなかなか話しかけないことがわかる。個人の行動様式を意識させた上で、氏は「状況が変われば話しかけるのではないですか」という質問を更に投げかけた。すると「相手が子連れだったら」「共通の趣味の雑誌を持っていたら」「具合が悪そうだったら」など状況が変われば話しかける人が大多数となった。話しかけるかどうかは相手による。ここでも関

係性の中で台詞や行動様式が決まってくことに気づかせていた。

8月20日(日)

会議室にてオリザ氏の前で修正した台本の内容を披露する。本番を約一ヶ月後に控え、大幅な修正はないようにと願いながら演じた。少しギャグを入れたところで氏が受けていると嬉しく感じた。

講評はエピソード的に台詞を増やす箇所があることと、ラストシーンだった。ラストシーンはアスペルガーの子が学校に残り、ロボカップに参加することで意見がまとまり、めでたく大団円となる運びだった。オリザ氏はそれが気に入らない。「きれいにまとめすぎ」と否定された。登場人物はアスペルガーの問題を真剣に考える人たちと、それ以上に我が子の活躍を考える人たちがいる。担任の向田は前者、問題を真剣に考える人として描いてきたが、「自分もロボカップ世界大会の応援にドバイに行きたい！」という人間的で可愛い欲望を出すことで、ラストシーンを書くことにした。

この頃、メンバーがSNSの機能を使って台本データをグループで共有し、各自が書き換えられるようにした。自分の台詞は言いやすく書き換えられるようになり、シナリオ担当の筆者の負担軽減になった。ラストシーンは担任役が更に「ドバイに行きたい」気持ちから「大富豪と出会いたい」気持ちに発展させていた。

### シナリオ(同時多発)を使ったワークショップ

この日、④⑤と記されたシナリオをオリザ氏から渡された。同じテキストが『演技と演出』にも掲載されている。このテキストを見ると台詞の一部に網掛けがしてあったり、☆印がついていたりする。☆印と網掛け、そしてしばらくして☆印と網掛けのように、異なる台詞に同じ☆印と網掛けが続いている。この箇所は同時に演じられることになっている。そう、これがオリザ氏のシナリオの特徴として注目される同時多発の

会話である。通常のコミュニケーションではこのような同時多発の高度な状況の中で、私たちが難なく暮らしていることをオリザ氏は示す。そして、カクテルパーティーで自分の関心がある話題に近づいていくように(カクテルパーティー効果)、観客は芝居の台詞の関心が高い方を聞いていればよいという。演劇制作という人為的な行為に発話という日常の視点を取り入れて再現しようとする実験的な試みは会話の生成メカニズムの研究対象にもなっている。その研究によると、複雑な動きをする時ほど俳優は多くの情報を一緒に記憶しているということである。それを教育に当てはめると、複雑さをそのまま学習することに大きな効果があると考えられ、<sup>＊10</sup>反復練習では得られないものを獲得する重要な視点を示唆している。

実際に同時多発のシナリオを演じてみるのは非常に困難を感じたが、日常の発話行為を考える上で興味深かった。教室の休み時間に教卓で作文指導をしていると、教室後方で柔道ごっこをしている生徒がいる。怪我の無いように留意しながら「気をつけて」「○○ちよっと止めて」など時折声掛けをして作文指導し続けるといことは全く日常的である。

多くの演劇のシナリオは誰か一人が台詞を語り、それに誰かが応じるという形で同時に二人の役者が別のことを話すことはまずなく、あたかも一本の軸のように書かれている。このような今までのセオリーを敢えて壊すことで日常の発話行為に近づける手法は実際の演劇づくりにも参考にしていった。同時多発まではいかずとも、二つのことが同時に進行していく状況下で台詞と台詞の間を極端に取らなかつたことである。舞台上での会話と下手での会話が互いに呼応したものではないことを表すために台詞をかぶせるまではいかなくても間を取らないことで同時進行の状況をプロット9で作り出そうとしてみたのである。

筆者は不参加。ホールでの練習。

9月3日(日)

9月17日(日)

集まれるメンバーで練習。人物の動きを動画で撮影し、SNSで欠席のメンバーに伝えた。この日に、舞台上での人物の動きをつけていった。

## 演劇づくり② リハーサル

9月23日(土)

発表の前日に筑紫野市文化ホールで本番通りにリハーサルを行った。アシスタントの村上氏がホールでの台詞の響きや立ち位置などを確認していった。

リハーサル室では部分練習をしていたのだが、この時練習で意識したのが間を取ることである。役者はストーリーを知っているものでその後の展開を急ぎたくなるのだが、観客の理解は役者よりも当然時間がかかるので、間を開けて想像させるところは十分すぎるほど間を取り、反対にその直前はコンパクトにするといひとオリザ氏は書いている。コンパクトにすることでメリハリが付き、場の雰囲気が変わることを明確にできるともある。そこで、ラストシーン、母親たちが退場する場面をコンパクトにして、校長と担任だけになり「やれやれ」と入る場面をやや長めに間を取った。そういう部分練習をしていた。

9月24日(日)

当日の午前中は最終リハーサルをオリザ氏の前で行った。修正箇所は二箇所。プロット8でアスペルガーの子を持つ佐藤が「うちの子をフリースクールにやろうと思ってるんです」と決意を述べた後にフリースクール賛成派の安武が「私もそう思います」のような同意の意思を示した方がいいというもの。ここは気持ちしが頑ななキツイ印象を持たせるために「私も賛成です」という台詞を加えることにした。

もう一箇所はラストシーンだった。ここでは担任がドバイに行って大富豪と出会いたい旨を述べて校長が駄目出しをする内容だった。オリザ氏は校長にも悪い意味での「人間性」を出したいと思ったようである。

アスペルガーの少年の参加が決まって、「やれやれロボカップは何とかなりそうだな」と校長が胸をなで下ろすやいなや「これで次の教育長は決まりですね」と担任が返すのである。当然校長は勝ち誇ったような高笑いをする。以下担任のドバイ行き願望はそのままいくことになった。

リハーサル室では変更二箇所の練習をした。前者は母親たちの気持ちの違いがより明確になる印象を自分たちでも持つことができた。そして、ラストシーンはやってみたらメンバー全員が大受けした。校長役も野心たつぷりの演技で上手い。この台詞を入れたことで、完璧ないい人が配役にいなくなり、開放的な印象を作品に持たせることができた。

## 本番

4グループの発表が終わり自分たちの番となった。幕が上がリ、舞台が始まる。プロットによっては上手くいかなかった箇所もあったものの、おおむね満足のいく発表となった。

本番中に気づかされたのは、午前中に変更した部分の観客の反応である。安武が「私も賛成です」と言ったところで場内から「はあ」ともいうようななどよめきが起きたのである。どうしてこの人(安武)はそこまでフリースクールにこだわるのかわからないといった疑問、他の人物との対立から生まれる不安定な感情が観客と共有されていることを感じた。また、変更があった「これで次の教育長は決まりですね」は場内大爆笑で校長の高笑いが聞こえなくらいだった。それで校長役は「笑うのは俺の方だよ」などと言っていたが、校長の高笑い以上に校長も悪だつたというオチに観客は笑ったのである。この辺りはオリザ氏にしてみれば狙い通りというところだろう。当日の変更点は演出家オリザ氏の読みの正確さと観客とのコミュニケーションを感じさせる瞬間となった。

## 振り返りアンケートと考察

演劇制作ワークショップを終えて、中学校の教師をしている筆者には

生活の中で感じる変化があった。

一つ目は「場所と人物構成」という関係性でコミュニケーションを捉えるようになったことである。問題を起こした生徒への指導をクラス全員がいる朝の会の中である場合と廊下に呼んでする場合、空き教室に呼んでする場合とは明らかに物言いが違うと思うが、それをより明確に意識するようになった。

また、人前で表情を変えることへのハードルが低くなった。演劇制作のワークショップを終えた頃、中学校では文化祭の準備に向かっていった。クラスの合唱指導の際に、正しく歌うだけではなく表情豊かに歌う工夫をさせることができた。もちろん、筆者が積極的に表情をつけて歌っていたのだが、生徒も次第に歌詞に合った表情で「怒り」「悲しみ」「喜び」「希望」などの気持ちを曲の流れに従って表情豊かに歌うことができた。コンクールでは優秀賞を獲得したので、私も取り組みに自信がついた。

もう一つ、聴衆を意識した話し方指導ができた。二学期には生徒会役員選挙があった。会長候補に四人が立候補し、筆者が担任をしているクラスからも一人立候補した。選挙活動はポスター掲示に始まり、朝の挨拶運動や各クラス巡りのPR、そして最後は立会演説会がある。演説原稿を訂正させ、空き教室を使って練習をした。今までの教師生活の中でも何度もこのような演説指導はしてきている。しかし、今回は聴衆と対峙した体感覚が残っているような気がした。それで、聴衆だったらどう聞くかということを意識した聞き手になって修正を加えていった。修正と言っても、ちよつとした間だとか強調などである。それが、結果として表れた。同じくらいに気力も人望もある生徒は他にもいたが、演説の印象深さで我がクラスの生徒が会長に選ばれた。演劇で得られるテクニクは言葉に力を与えることにも気付かされた。

この三点は教師としての技能につながるものである。より良い指導に

つながる技能はあった方がよい。

私自身、自分自身への変化や気づきがあったことから、ワークショップの参加者にアンケートで聞いてみることにした。ワークショップも終了し、回答が得られたのは十人以下だったので集計数は少ないが、その中でも顕著だった質問事項と記述を紹介したい。

Q1 生活の一場面がワークショップの後では違うように感じることはありますか。

はい5      いいえ1      わからない2

Q2 「はい」の人に質問です。それはどのような場面ですか。

A1 話し合いだけでなく、会話も意識的になった。

A2 会話、打ち合わせの時に一呼吸おいて話すようになった。

A3 理不尽なことも諦められるようになった。人のアイディアを聞くことが楽しくなった。

A4 他人の意見を理解しようという気持ち、協働でものを考え、折り合いをつけて先に進むという考えが身についてきた。

A5 「場」に居合わせる人の構成を考えて話すようになった。

A1、2は話し方への意識の変化である。今まで顧みては来なかった「話す」技能の向上が考えられる。A2は相手意識も表れている。一呼吸置くことは、話し手にとってはこれから話すことを更に整理して伝えられるだろうし、聞き手にとっては話し手よりも遅れて理解するので、そのタイミングにマッチする。

A3、4は自身の考えに固執せず、相対化する柔軟性が身についている。また、違いを不満から喜びと感じ、同じ目的のために妥協点を探っていく思考を肯定している。



A5はオリザ式プロットの見方で実生活の場面を捉えている。

**Q3 演劇がコミュニケーションに役立つと思えるのは演劇のどのような性質や活動によると思いますか。**

A1 日常生活で緊張せず堂々と話せるようになったのは、発表する体験があったから。

A2 対話や問、観客とメッセージや物語を共有すること。

A3 他者の会話（台詞）から様々に想像して相手の思いを考える。

A4 疑似体験で他者理解の幅が広がった。

A5 相手がいてストーリーが進むこと。

A6 役割は選ぶことができるが、途中では止められず役割を果たすこと。

A1は一般的に理解できる。A2は「役者同士」「役者と観客」との間のコミュニケーションを述べている。それは技能面についても、そして伝える、共有する内容についてもである。A3〜5は他者理解が進んだこと、相手を尊重する気持ち自然と生じたことに触れている。A4は演じるという体感覚で理解したと述べられていて興味深い。A6は役割を果たす責任のことを述べている。役割というと仕事分担の一部のような響きだが、これは演劇なので誰かの人生の一部を想定した「役」のことでもある。役を演じると「自分という役」目、役割にも目が向く。演劇の「降板」はやむを得ず生じる場合があるが、自分を降りることはもちろんないわけで、アンケートに書かれてはいないものの、演劇発表を終えたメンバーからは、その後の各個人の歩みがそれぞれにもっと確かなものになっているエネルギーを感じていた。

**Q4 オリザさんのワークショップでしか得られないものは何だと思いますか。**

いますか。

A1 対話劇 A2 ゼロから創る演劇

A3 民主的に物事を話し合いで決めていく体験（他は力のある人がない人をお願いする）

**Q5 自分たちのグループの演劇づくりや発表を通して、テーマや題材に対する考えが深まりましたか。**

はい 5 いいえ 0 わからない 3

**Q6 「はい」の人に質問です。それはどのような点においてですか。**

A1 深くなるというより変化進化していった感じ、「なぞとき」みたいな面白さが入り口だったが、「家族」のドラマになっていた。

A2 自分の人生において少なからず共感できる所があった。

A3 福祉や高齢者の生き方について。

A4 正解、正しい答えはないということ。

A5 私は保護者（母親）の立場でアスペルガーの子どもを見ているが、先生と一緒に演劇をつくることで先生の立場からみたアスペルガーの子どもを知る機会になった。

Q4のA1はオリザ氏の演劇の特徴である対話劇を学ぶ、内部の人間と外部の人間との対話で物語が展開するスタイルの体験を述べている。A2のゼロから創る演劇ワークショップはほとんど行われていないということなので貴重である。A3は様々にワークショップを経験している人が書いているので、オリザ氏のワークショップの進め方や民主的であろうとする方向性が見える。実際オリザ氏は演出家の権力性を認めながらも、俳優を演出家、劇作家と向い合うべき独立した主体と述べている<sup>\*1,2</sup>

し、演劇という存在が古代ギリシャで生まれた民主制と相関関係があることを述べて、演劇が民主制を支える市民としての対話の訓練だったとしている。<sup>\*13</sup>オリザ氏がいうように対話劇が民主的な市民、主権者を育てる訓練になることは考えておきたい。

Q6の「テーマ、題材の深まり」について、A1の回答はオリザ氏のアドバイスやメンバーとの協議で演劇の内容が進化発展したことを記している。ワークシヨップ参加者は他のチームの発表を段階的に見ているので、その変遷がわかる。A2も同じチームの回答。A3の回答者のチームはおばあさんの生き方で家族が振り回される内容の演劇だった。家族の考えが少しずつ変わる展開や、おばあさんにも自由な生き方があることという話で話がまとまる開放感があった。A4、5は自分たちのチームのことである。学校に残るべきかフリースクールに行くべきかに正しい答えはない。それを観客にも問えたのではないかと思う。A5の回答はシナリオによく表れている。母親の立場からの台詞はプロット14の台詞で、アスペルガーの息子を持つ安武が息子に問題がある度に相手の家に謝って回った、自分のしつけがわるいではと自分を責めていた下りである。これはメンバーからの情報で、アスペルガーの子どもを持つ母親にそのような方がいらしたということからだった。(メンバーは不登校児の親の相談を日常的に行っている。)また、教師(筆者)からの視点はアスペルガーの翔君に友達がいらない(プロット11)ことや、昆虫に造詣が深く、昆虫の特徴を熟知していたこと(プロット7)、プログラミンの才能があること(プロット5)などである。私には過去に関わった何人かの生徒のイメージがあった。発達障害の人というのは脳内の情報処理のシステムが異なっていて、それ故人間関係に困難が生じたり友達ができなかつたりする。しかし、システムが異なるからこそ天才的な能力を持っていたり、その可能性を感じさせる魅力があった。母親から見たアスペルガーの子と教師から見たアスペルガーの子の姿を照らし合

わせることで、人物像が一面的にはならず立体的なりアリエーが生まれた。また、演劇は自分たちが出会ってきた生徒やその母たちに見せる訳ではないが、制作しながら彼らにギフトしたい気持ちやメンバーで共有していた。そんな雑談をしながら台詞づくりをしていた。発表を終えて、会場からの感想に次のようなものがあつた。

お芝居は「夢見るドバイ」が心に残りました。アスペルガー、口ボカッ、ドバイと、ある方を思い起こさせるキーワードが入っていました。

この芝居のテーマは「発達障害の生徒やその家族が抱える生きづらさ」だった。どんなに重要なモチーフ、テーマもこのように一言で言ってしまうと空しく思えるが、芝居にすることによって実際の誰かを思い起こさせた。おそらく、問題の難しさをリアリティや実感を伴って伝えることができたのだ。

オリザ氏は次のように述べている。<sup>\*14</sup>

演劇とは、リアルに向かったの無限の反復なのだ。その無限の反復の中で、ゆっくりと世界の形が鮮明になっていく。この混沌とした世界を、解りやすく省略した形で示すのではなく、混沌を混沌のまま、ただ解像度だけを上げていく作業が、いま求められている。

十五分のドラマによって混沌を混沌のまま、解像度を上げて伝える作業を少しはできたと考えている。

### オリザ式ワークシヨップとコミュニケーション教育

「演劇」には教育効果がある。動作を伴うことで朗読以上の実感を得

られる。喜怒哀楽、さまざまな感情を味わえる。自分から離れた人物の考えが想像できる。発表には緊張感を伴うものの、する方も見る方も面白さ、楽しさがある。そういうことは今までの教育活動の中で感じてきた。

では、オリザ氏の手法ではどのような学びがあるのか。

今回のワークショップを振り返ると、「声を出して仲間を集めるワークショップ」には初対面の人に自分の状況を伝える訓練ができた。「身体のワークショップ」は短時間で信頼を築く体験ができた。「カードを使ったワークショップ」は言葉の意図するところを探る訓練だった。シナリオを使ったワークショップは三種類あった。さまざまにオブションを加えることで台詞を言う緊張から離れられるというもの。個人の行動様式と発話行為との関連を振り返らせるといふもの。日常の情報処理と発話行為との関係性考えさせるもの。このようにまとめて書くことはその他の情報を切り落としていくことでもあるので、一つ一つの取り組みにはもつと様々なコミュニケーションの可能性があることを含めておきたい。

演劇制作を振り返ると、メンバーで意見を出し合い、話し合いながらストーリー展開や台詞を決めていった。このことを振り返りの中で多くの参加者が意義深く感じていた。自分たちのグループも、メンバーの発想力や持ち合わせている情報に助けられることが幾つもあった。こういった取り組みは、今でいう「主体的・対話的で深い学び」(アクティブラーニング)にあたる。

また、オリザ氏の演劇制作に関する情報を得ることもできた。具体的にはセミパブリックな場所が対話劇の起こる場所となること。「場所・背景・問題」という入り口を出発点にアイデアを提案し、プロットの作成によって展開を見えるように示し、それが成立して台本作りをする。台本はストーリー展開に必要な台詞以外のエピソードも大切だということ。間の取り方で伝わる印象が高まること。普段している動きなが

らの発話行為などである。オリザ式の演劇を体験して思うのは、作品を発表する行為と同じ位の強さで現実世界の「場」を想像させることである。人間相互の関係性や発話のシステムを捉えての演劇づくりなので、外界につながる思いに自然となっていく。天文台から星々がはつきり見えるように劇場から世界を見ると風景の輪郭が鮮やかさを増して現れる。演劇が単独の芸術作品として独立しているのではない。演者と鑑賞者によって新しいものの見方を、世界を分析するためのレンズを獲得する。

演劇の練習、リハーサル、発表から学んだことは、まず役者同士のコミュニケーションである。プロット7の最後に安武が校長を責める場面では校長がうろたえたように返事をし、担任が申し訳なきように頭を下げる。状況を深刻に捉えていないように見えるから責めた訳だが、担任は両者の思いを知った上で担任らしく安武に合わせた態度を取る。少しの動作が場の雰囲気をつくり出す。

プロット11は魚住と古賀の共通理解(ロボカップ参加のために翔くんはフリースクールに行かせない)のもと佐藤に説得する。佐藤は違和感の中で返事をする。その「通じないこと」を含めた状況を三者がコミカルに演じていた。また、正論が正論として通じない難しさを金子みすずやインクルーシブを持ち出してプロット12で表現した。これは、役者同士も、役者と台本とのコミュニケーションともいうことができる。

リハーサルと本番では演出家としてのオリザ氏の意図を知ることができた。修正を行うことで人物のカラーがはっきりとして作品全体の鮮やかさが増した思いだった。

そして、本番では観客とのコミュニケーションを感じることができた。それは舞台で感じたのと、会場のアンケートからである。

今回の演劇制作ワークショップは全八回のスケジュールが組まれていた。演劇制作はこのように時間をかけてできることと、今あるテキストをアレンジするなど短時間でできるものもある。<sup>\*15)</sup>

コミュニケーションという時、それは面接やプレゼンのテクニックだったり、外国人との交流のことだったり、没コミュニケーションの問題として語られることが多かった。もちろん、そういう部分もコミュニケーションを語る重要さを表しているが、オリザ氏のワークショップや演劇制作の活動を通して、日常の動作や発話行為に自覚的になったり、他者と意見をすり合わせることや、他者と向き合うことへの認識が深まったり、困難な問題をより見える形で提示することなどを学ぶことができた。このことから、演劇手法を取り入れた教育活動が広がることは、人間存在への理解や広く世の中を理解することに役立つと確信している。

共同研究者でありグループのメンバーでもある仲間の協力によって演劇づくりをすることができた。そして、他のグループからも様々な気づきを提供して頂いた。毎回の運営面や参加者へのサポートなど、ふくおが教育を考える会の役員の方々にも感謝している。そして何より、演劇が音楽や絵画と同様に一つの表現手段としてさまざまな可能性を持つものだということを提示して頂いた平田オリザ氏に感謝を述べたい。

参考文献 『演劇入門』平田オリザ 講談社現代新書 1998

『演技と演出』平田オリザ 講談社現代新書 2004

『発達障害』岩波明 文春新書 2017

注

\*1 「ふくおか教育を考える会」が主催している。全ての子どもに教育の権利を保障したいという思いから、不登校児の支援やさまざまな学習会を行っている団体で、今回のワークショップは筑紫野市教育委員会が後援となった。

\*2 オリザ氏はこのズレのことをコンテキストのずれと説明している。そして氏は、ワークショップや演劇によってずれを認識し、その摺り合わせや、共有、新たなコンテキストの生成を目指している。『演劇入門』P150～

\*3 筆者は横浜市の中学校で十四年勤務し、その後福岡県の中学校で五年勤務している。都会と地方との比較は筆者の経験による。

\*4 『演技と演出』P26 通常はステータスと呼ばれるがこのルールはオリザ氏のオリジナル。

\*5 『演技と演出』P69

\*6 DSM-5ではアスペルガー症候群は呼称として使用されなくなり、ASD自閉症スペクトラム障害の一部とされている。その特徴として「コミュニケーション、対人関係の持続的な欠陥」と「限定され反復的な行動、興味、活動」とある。『発達障害』P24) 演劇づくりでは広く普及しているアスペルガーの呼称を敢えて使用した。

\*7 オリザ氏はコミュニケーション教育を軸とした兵庫県豊岡市「このとりプラン」(教育プラン)の作成に関わっている。また、豊岡市の芸術文化参与、城之崎国際アートセンター芸術監督など文化芸術を軸としたまちづくりに取り組んでいる。



- \* 8 『演劇入門』 P98
- \* 9 氏は90年代に関係性の演劇が出現したことを示した。それまでの新劇と、それに対抗したアングラ小劇場が共に主体性に依存した表現だったとして関係性の演劇と峻別している。オリザ氏の演劇は関係性の演劇である。『演劇入門』(P183～)
- \* 10 『演技と演出』 P135～
- \* 11 『演技と演出』 P119～
- \* 12 『演劇入門』 P180
- \* 13 『演劇入門』 P199 古代ギリシャでの演劇の発生と同じく対話を前提とした思考表現の範型として発生した哲学についても触れている。
- \* 14 『演劇入門』 P203
- \* 15 \* 7 「このとりプラン」では小六と中一との接続を考慮して、両学年各学期に二時間～三時間扱いのコミュニケーションゲーム、演劇活動の単元を設けている。

タイトル「夢みるドバイ」

\*プロット1 \*文化祭前の会議室バザーの準備を  
している二人

安武 古賀さん、エアコン入れてくれる？

古賀 はい。九月も終わるっていうのに、今日も  
暑いですねー。

\*戸まで行きスイッチを入れ、そのまま後ろ  
のテーブルの段ボール箱の中を見る……

安武 ホント、会議室エアコンが入るから助かるわ  
ー。あ、手作りマスコットの値札は全て二〇  
〇円でお願ひ。

古賀 はい。今年はずつけん少ないですね。

タオルは沢山ありますけど。  
\*タオルの箱を数える真似

安武 ああ、山本さんのおばあちゃん思い出しちゃ  
った。

古賀 タオルを買った人でしたっけ？

安武 そう、三十分も前から並んで五箱も買って  
て。バザー楽しみにしてくれてるのね。

古賀 そんなに何に使うんでしょうね。  
\*口に手を当てて、笑うしぐさ

安武 確かに。タオル好きなんですよ。

古賀 マスコットは200円ですね。

\*と言いつつ、値札付け  
(間) 明日、晴れるといいなあ。

安武 雨だと荷物が大変だから、文化祭だけで帰っ  
ちゃう人もいるのよね。

古賀 そうですよ。売り上げに即影響でますか  
らねー。

\*安武うなずく。

\*プロット2 \*魚住登場

魚住 遅れてごめんねー、安武さん、バザー品の集  
まり具合どうですか。

安武 いい感じであつまってるわ。今、値札付けし  
てたの。

魚住 了解、どんどん付けちゃいましょう。

\*バザーの作業

魚住 あのさー、さっき聞いたっちゃけど、佐藤翔  
くん休んでるのって窓から飛び降りたらしい  
よ。

安武・古賀 ええつ。 \*前のめりの感じで

安武 いつ？

魚住 三日前。

古賀 どこから？

魚住 教室だつて。

安武 教室つて三階よ。死んじゃうじゃない。

古賀 うちの子そんなこと何も言つてなかったです  
よ。

魚住 あの子、ちょっと変わってるっていうか、空  
気が読めないっていうか。

安武 あつ翔くんならやりかねないわ。あの子アス  
ペでしょ。いろいろ真に受けちゃうもの。

魚住 アスペってアスペルガー症候群のこと？

安武 そう。

古賀 翔くんってそうなんですか？

魚住

気になるねえ。  
\*アスペを気にしているのではない

\*プロット3 \*SC香山登場

香山 あのー、すみません。こちらに佐藤さんはい  
らっしゃいますか。

安武 香山先生、お久しぶりです。その節はお世話  
になりました。

魚住 スクールカウンセラーの香山リカ先生。

\*古賀に対して

香山 リカです。ああ、安武さん。その後お変  
わりないですか。

安武 お陰様で、元気にやっております。

香山 先生、ちょっといいですか。翔くんが飛び降  
りたつて聞いたんですけど、大丈夫なんです  
か。

香山 実際には飛び降りてないんです。ちょっと、  
話はできないんですけど。  
まあ、もう大丈夫ですよ。

安武 なんか、みんな事件だと思ってるんです。

香山 あー。気になってるんですね。

安武 心配してます。

香山 そうですよ。

魚住 あの、先生、周りにいる人が気をつけること  
があつたら教えて下さい。

香山 わかりました。

古賀 よろしくお願ひします。 \*お辞儀する

安武 佐藤さん、翔くんをフリースクールに行かせ  
るつて言つてませんでしたか。以前から考え

られてて、とつてもいいことだと思うんですけど。

古賀 \*うなずく

魚住 え、いいことですか？ この学校にいる方がいいと思うけど。

古賀 え？

香山 それは、佐藤さんが考えることですから。

\*プロット4

香山 では、私は佐藤さんと話があるので、これで。 \*香山退場

安武 クラスに一人いるだけでも大変なのよね。

魚住 そうかなあ。

古賀 やっぱリースクールですか？ \*話してから安武さんの方を見る

安武 そう。アスペの子がいると学校はやっぱりやりにくい時もあるのよね。学級崩壊とか事故とかいじめとか起きやすいのよ。

古賀 うちの子ただでさえ頭悪いのに、授業が遅れると困るんですけど。

安武 \*ちよつと違うなと思いつつもうなずく

\*プロット5

魚住 あの一、バザー品ってここにあるだけでしたっけ？

安武 あ、職員室に追加の荷物あるんで、取って来るわね。 \*安武退場

古賀・魚住 はい。お願いします。

\*黙つてもくもくと値札付け

魚住

ねえ古賀さんはさあ、リースクールがいいと思ってるの？

古賀

え？ そういう訳でもないですけど。

魚住

古賀さん、ロボカップのこと聞いてない？

古賀

ロボカップ？

魚住

ロボ、カップ！

古賀

それ何ですか？

魚住

ロボットの大会のジュニア部門。来年の5月に北九州で予選会があるんだけど、いま子どもたちがチームつくってその準備をしてるって。

古賀

誰がですか？

魚住

翔くんよ。翔くんはプログラミングの天才なんだって。そして、うちの悠斗と努くんもそのチームのメンバーよ。

古賀

勉がメンバーですか？ホントに？うちの子、頭悪いし、賞状なんて一回ももらったことないんですよ……

魚住

いやいや、一緒にロボットつくってるんだって。それで、予選通過したら、全国大会も、世界大会もあるのよ。来年の世界大会はドバイよ。

古賀

えー。あのドバイ？

魚住

そう！しかも、優勝チームはご招待。タダよ。

古賀

タダ！

魚住

そう、タダ！

古賀

ドバイ 行きたい！

魚住

でしょ。だから、翔くんがリースクールに行つちやうと困るんよ。

古賀

ホントですわね。

魚住

翔くんと一緒だったらドバイも夢じゃないんよ！

古賀

すごい、ドバイ賛成！リースクール反対！ \*二人こぶしを上げる

\*プロット6

\*そこへ安武がバザーの商品の箱を持って入ってくる

安武

お待たせしました。商品いっぱいあるわよ！ \*上げたこぶしをこまかして作業に戻る二人

魚住

ありがとうございます。

古賀

…… (\*黙つて会釈)

安武

この商品は、三〇〇円から五〇〇円でお願います。

古賀

はい。了解です。

魚住

あ、これブランド物のタオル。シャネルだから七〇〇円はつけないと。

古賀

えっ。やっぱりそうですよね。

魚住

このマスコットは汚れてるやん？三〇〇円じゃなくて一〇〇円じゃないと売れないよ。

古賀

なるほど！（次は安武の方を見て）どんだん値札つけますねー。

\*安武は変だなというリアクション

\*プロット7

\*校長・担任が来る

校長（田中）

みなさん、お疲れさまです。

安武

あつ校長先生。今年は商品が集まってるんで、

バザー盛り上がりですよ。

担任（向田）暑かったでしょう。

安武

それでさっき、エアコン入れちゃいました。今年は食器も意外とセンスがいいのが集まっていますし、制服リサイクルのコーナーも数がそろっていますよ。

担任（向田）いいですね。目標金額は達成できそうですね。

安武

ええ。\*担任に近づいてあの…佐藤翔くんが飛び降りようと（？）したって聞いたんですけど、どういう状況だったんですか？

\*校長と担任は目配せして話していいか確認をする。（間）

担任

（向田）授業中に窓から入ってきたんです。トンボが。珍しいトンボだったらしくて、翔くん、捕まえようとして夢中になって窓から落ちそうになったんです。

古賀

ああ、飛び降りようとしたんじゃないんですね。

担任

（向田）ええ。クラスの子たちが押さえてくれて、落ちずに済んだんです。ちよつと、騒ぎにはなりましたけど。

魚住

それはびっくりしますものね。

校長

（田中）いやあ、翔くんは昆虫に対する造詣も深くて、そのトンボはオニヤンマに似ているけど特徴としてあるはずの胸の前のハの字模様がないから、新種か何か確かめたかったと言っていましたよ。捕まえられなかったんですけど。いやあ将来が実に楽しみです。

安武

校長先生、翔くんが心配じゃないんですか。

校長（田中）もちろん、お気持ちはわかります。

安武 だったら、ちゃんと見ていて下さい。

\*プロット8 \*佐藤・SC香山が来る

香山 こちらで作業されていますよ。

佐藤 ありがとうございます。もう、大丈夫です。

香山

はい。\*佐藤から安武を見てああ、安武さん。久しぶりにお会いできてよかったです。では。

安武

こちらこそ。

\*香山退場 \*安武はイスを差し出して

安武

佐藤さん、ここ座って。

古賀

何か、大変でしたね。

魚住

翔くん休んでますよね。大丈夫ですか。

担任

（向田）クラスのほうは、大丈夫ですから安心して下さい。

佐藤

あの、今回みなさんにたくさん迷惑かけてしまったので、うちの子フリースクールに行かせようと思っているんです。

安武

私も賛成です。

担任

（向田）佐藤さん、その件は、焦らずに考えて下さい。

\*プロット9 \*携帯が鳴る

魚住

あ、はい。魚住です。わかりました。今、取りに行きます。

PTA会長が、荷物持って正面玄関に来られたからとりにいきましょつか、私とあと二人お願いします。

母三人 はい。

\*皆立ち上がる

\*古賀も含めて4人で出口の方へ行く

安武

古賀さんは値札つけていいわよ。

\*三人の母親が出て行く。古賀は戸のところまで先生たちの話を立ち聞き

校長

（田中）いやあ、まずいな。佐藤くんがフリースクールに行ってしまうては。

担任

（向田）はい。翔くんは、あれ以来休んでいますし。

校長

（田中）ロボカップはどうなるんだ。彼が学校から離れてしまったら作業は厳しいだろう。

古賀

あのー校長先生、古賀努の母ですけど、本当にうちの子ロボカップに出られるんですか？

\*恐る恐る先生方の方へ歩み寄りながら

校長

（田中）ああ、古賀くんは手先が器用で言われたとおりに加工してくれますよ。

古賀

まあ。

校長

（田中）あのトンボ型ロボットが完成したら世界初ですよ。

古賀

世界初！！

\*プロット10

校長

（田中）ではこれで。

\*校長・担任退場

古賀

失礼します。

校長

（田中）\*校長退場しながら問題は佐藤翔くんがこれからどうするかだ。

担任

（向田）佐藤さんもロボカップについてはまだよくわかってないようですから話してみます。気持ちが変わるかもしれません。



校長(田中) 頼むよ。

古賀 (間) 努力。ロボカップかあ。ドバイ。パート代でジュエリー買っちゃおうかなあ。何着ていこう。 \*夢見るように

\*プロット11 \*荷物を持って母二人(佐藤・魚住)が戻る

魚住 あー、商品増えたねえ。値札つけ頑張らなくっちゃ!

古賀 お疲れさまです。  
\*段ボールを受け取りながら

\*バザーの作業 (間)

魚住 佐藤さん、さつき話してたんだけど、翔くん。私、フリースクールよりここで一緒にやってみようがいいと思うよ。

佐藤 え?

魚住 安武さんはフリースクールがいいと思ってるみたいだけど。翔くん、頑張ってるこの学校を卒業しようよ。

佐藤 翔には友達もいませんし。

古賀 今聞いたんですけど、翔くんはプログラミンがすごいんですってね。ロボカップにうちの子たちと一緒に出てほしい。

佐藤 え?ロボカップ?

古賀 世界大会はドバイよ!!

佐藤 世界大会?ドバイ?

魚住 いやいやロボカップがどうこう、じゃないのよ。みんながここで一緒にいることが大事だと思ってるよ。

古賀

魚住

古賀

佐藤

魚住

佐藤 うちの子、一緒にやってるんですか?

魚住 そう、だからチームでやっていくためにもフリースクールには行かないで、ここにいるほしいんよ。

佐藤 翔は変わった子なんですけど、大丈夫なんですか?

古賀 だからこそ、才能があるんだわ。翔くんが困った時はうちの子たちがフォローしますよ。

佐藤 はい。

魚住 この学校に居てくれる?

佐藤 翔と話してみます。

魚住 よかった。

\*プロット12 \*荷物持って安武が戻る

安武 会長の奥さんの手芸の腕前はさすがだわ。ペットボトルホルダーなんかとてもセンス良くついでいいわよ。

魚住 \*作業を始める

安武 安武さん、今、私たち佐藤さんを説得してたんよ。フリースクールは考え直すって。

魚住 え?

安武 だって、このほうがいいじゃない。

古賀 そうそう。

魚住 フリースクールって公教育じゃないでしょ。そんなところに行くの翔くんかわいそうよ。ここでみんなといたほうが絶対いいって。

古賀 みんな違って、みんないいとか言うじゃない。何だっけ金子...

古賀

魚住

古賀

魚住

魚住 金子・み・す・ず! \*指を立てて

魚住 オランダやデンマークではインクルーシブが常識よ。

古賀 インクルーシブ?

魚住 特性がある子もない子も、障害がある子もない子も一緒に学ぶ教育のこと。多様性の中で育つからたくさんの学びがあつてすばらしいって聞いてたことある。

古賀 \*両手を広げて話す。ある子ない子で左右。両者もで両手。最後は拳をにぎる。

安武 素晴らしいわ。 \*古賀も両手の拳を握る。

古賀 ちよつと待って。佐藤さんはいろいろ考えて決めようとしているのよ。

安武 フリースクールは特性を持っている子に対して学校より手厚く面倒見てくれるからいいってことがわからないの?

魚住 みんなでフォローし合えば何とかなるわよ。

古賀 \*古賀大きくうなずき、佐藤もゆつくりうなずく。

安武 また、飛び降りようとしたら困るでしょ。命の問題なのよ。

\*プロット13

佐藤 もう、皆さん、いいですから。 \*佐藤退場

安武 佐藤さん! \*安武退場

魚住 何で安武さん、あんなに怒ってるの?

古賀 さあ?

魚住 私たち、翔君のために言ってるのにねえ。

古賀 そうですよね。

\*プロット14 \*担任が来る

古賀

魚住

古賀

担任（向田）何かありましたか。

\*魚住・古賀は目を合わせて少し肩をすくめる

魚住 あの一、佐藤翔くんがフリースクールに行かないように止めてたんですけど。

古賀 それで安武さんが急に怒り出しちゃって。あんなにフリースクールを勧めるなんてね。

魚住 ほんと、意味わかんない。

担任（向田）安武さんの、怜香ちゃんのお兄さんのこと知ってますか？

魚住 大学生ですよ。

担任（向田）お兄ちゃんは翔くんみたいな子だったんです。当時はアスベルガーの特性を理解できる人が少なく、安武さん、トラブルがあるたびに、一軒一軒謝ってまわってたんです。自分のしつけや育て方が悪かったって……

魚住 ああ。

担任（向田）それで、フリースクールに行っただけです。だから、佐藤さんのこと、自分事のように思われたんでしょう。

古賀 それで、あんなに。

\*プロット15 \*佐藤・安武戻る

安武 さあ、続きやりましょう。

佐藤 はい。

担任（向田）安武さん、翔くんが窓から落ちそうになった時、体を張って止めてくれたのは怜香ちゃんですよ。

安武 うちの子がですか？

担任（向田）そう。怜香ちゃんのおかげで助かりました。あ、それから今、ロボカップの準備をしているのですが、怜香ちゃんもメンバーですよ。

安武 怜香がロボカップ。

担任（向田）ええ。翔くんと悠斗くんと努くんと怜香ちゃん。

佐藤 本当に、みんなで協力してやってるんですか？

担任（向田）翔くんはプログラミング。悠斗くんはリーダー。努くんはメカニック。半田ごてを校長先生から習って上手ですよ。

古賀 そうなんですか。 \*嬉しそうに

担任（向田）怜香ちゃんはプランニング。お兄さんのことで慣れていて、人を見る目があるんですね。

安武 はい。 \*佐藤うなずく

担任（向田）佐藤さん、フリースクールっていうのも一つの選択肢ですけど、今は子どもたちを見守らせていただけませんか。

佐藤 そうですね。 \*自信なさそうに

\*プロット16 \*校長がポスターを持つてくる

校長（田中）みなさんそろっていてよかった。明日、ロボカップのポスターを貼り出そうと思つてます。予選会出場決定。四人の名前も入れています。

\*口々に「すごい」「いい」「素敵」などと言つて盛り上がる。

校長（田中）佐藤さん、せめて予選会だけでもいいですよ。

担任（田中）いいいながら退場

校長（田中）ダメ！

担任（田中）玉の輿！！！！

校長（田中）ダメ！

担任（田中）ダメ！

佐藤 はい。 \*さつきよりははつきりと

魚住 校長先生、今ポスター貼つてきていいですか。

校長（田中）もちろん。

魚住 じゃあ、行きましょう。どこに貼ろうか？

古賀 みんなが見るところがいいですね。

魚住 やっぱ正面玄関とか？

古賀 いい！

\*安武、佐藤も目を合わせて納得する。母四人退場

\*プロット17

校長（田中）やれやれ、これでロボカップ参加はなんとかなりそうだな。

担任 はい。これで次の教育長は決まりですね。

校長 ワハハハハハ。

\*二人退場しながら

担任 あの、校長先生。ドバイ、私も行けるんですよ。

校長（田中）何言ってるんだよ。引率は私ですよ。だいたい君は仕事があるじゃないか。

担任 夢だったんです。大富豪との出会い！！

校長 君は仕事！

担任 玉の輿！！！！

校長 ダメ！

\*アドリブで言いながら退場